

## 「なぜ？」

——フィリップ・サマンとの対話より

ジャン・ルーク・キャブロン / 訳=尾崎澄子

### 際限のない探究

サマン・アンド・パートナーズにおける建築へのアプローチの方法は「問う」こと、すなわち「なぜ？」という一言に尽きる。それは基本を理解するための際限のない探究である。先入観の考えやうわべだけの知識に頼って事にあたるほど危険なことではない。これまで何の「問いかけ」もされずに「○○と言われていた」とか「今までずっとこうだった」という形で受け入れられてきた、「あいまいな確信」に基づいた建築があまりにも多すぎる。しかし建築家はそこに展開しつつあるコンテキストを考慮しなければならず、それには発見し、考案し、創造し、あるいはせめて「リライト」ぐらいはするべきなのである。

ひとつひとつの構成部分の基本を理解しようとする、膨大な数の先入観の考えについて「問う」ことになるが、その数の多さゆえに、多くのRC建築に見られる反復的構造は、一見とても洗練されていて完璧な厳格さを備

えているように思えてくる。しかしそれを鵜呑みにしてそのまま取り入れた結果は、うわべだけの厳格さになってしまうのである。

「なぜ」を理解するための「問い」は概念にかかわってくる。しかしそれらはその時点でのコンテキストについて必ずしも時代に合った答えを返してはくれない。そこで、「問い」に対する答えを現代的なものにして、コンテキストと相関させる必要がある。サマンによる調和数列に基づいた構造は、そのようなアプローチの一例である。伝統的な梁による大空間の架け方は、同じ長さの部品でできた規則的なメッシュを並置するというものである。ところが今日ではロボットを使って梁を様々な長さの棒材で作ることができ、それによって調和数列に沿ったメッシュが可能となり、しかもその方がいろいろな制約によりうまく対応できるのである。このようにサマンのアプローチには固定化した定理などというものではなく、細心さをもって「問い」続ける姿勢

に基づいた絶え間ない進展があるのである。

### 建築——発見・考案・創作

世界が変化すれば「問い」に対する答えもまた変わるべきである。建築家の役割は、コピーすることに身をおとしめることではないし、ましてや自分自身の作品をコピーするなどはもっての外である。サマンは、自身と同じベルギー・ロイヤル・アカデミー会員である建築家ジャン・コス言葉を借りて、「非常に短期間で描き上げられた作品などというのはコピーに頼ったものだ」とまで言っている。

このようなアプローチには当然時間もかかるし、周囲のすべて、その建築作品を構成するすべてに対する絶え間ない配慮が必要となってくる。なぜなら建築とはあらゆることに対して常に「問い」続けざるを得ない、成熟に向けての長いプロセスだからである。作品を考えている時に自分自身に「問い」かけるということは、自身に「なぜ？」と尋ねるこ

### “WHY?” : An interview with Philippe SAMYN

by Jean-Luc CAPRON

The Architectural approach of Samyn and Partners is a questioning one which can be summarised in one word: “WHY”. It is the unending search for understanding basics, because nothing is more dangerous than to work with pre-conceived ideas or with superficial perceived wisdom. Too much architecture is based on uncertain assurances which in turn is based on “it is believed” or “it has always been done this way” and which have never been questioned. It is for the architect to discover, to invent, to create or at least to ‘re-write’ in order to take account of an evolving context.

In seeking to understand the basis for each of the component parts, one is led to question a large number of pre-conceived ideas.

Thus the repetitive structures of many buildings in reinforced concrete are apparently so refined that they seem to be fully rigorous. But this external rig-

our is only superficial and it requires the engineer to follow less rigorous avenues of steel reinforcements drowned in concrete.

None the less, these questioned things of which one seeks to understand the “WHY” are of a conception prior to the questioning. They offer unsynchronized responses in relation to the context of the moment. It is necessary therefore to bring the answers to the questioning up to date in function of the context.

The structures based on harmonic progressions developed by Philippe Samyn are examples of such an approach. The traditional trellis beams respond to the bridging of large spans by the juxtaposition of regular meshes made up of pieces of identical length. Today, the use of robots permits the production of trusses with bars of variable length of which the mesh develops according to harmonic progression and which responds better to the constraints. There are therefore no fixed dogmas, but a constant evolution which is based on a continuous putting into question done with precision.

If the world changes, the answers to the questions must change also, thus the role of the architect cannot be to reduce himself to copying; all the more so, can he copy himself. Paraphrasing the architect Jean Cosse (Space Design 8702), also a member of the Royal Academy of Belgium, Samyn concluded that a project which is very rapidly drawn up is a project for which one proceeds by copying.

Naturally such an approach requires time and a constant attention to all that's around us and all that makes up an architectural project. Architecture is a long process of maturing which obliges constantly to put things into question. To put oneself into question when one is conceiving a project is to ask one's self WHY; why such a line, why such a technical solution and not another.

“The scientist discovers, the engineer invents, and the artist creates” it is said.

The architect is at the same time all three, but is never entirely one of the three, because he cannot practice these roles from morning till evening. In the work of an architect, to discover, invent and create is not a continuous process.

とであり、「なぜこの線なのか」「なぜその工法にするのか」「なぜ他ではだめなのか」と絶えず尋ねることなのである。

「科学者は発見し、技術者は考案し、芸術家は創作する」とよく言われる。建築家は同時にこの三者であり、かといってそのどれかになりきることはない。建築家の仕事においては、発見・考案・創作は連続したプロセスではない。実際、コンセプトの主要素は相互に作用しあうものなのである。ひとつの発見によって、別の発見が無効になることも、またある発明が別の発明を誘発することもあるのだ。例えば建築家が幾何学に取り組む時のアプローチの仕方は、科学者のそれと似ている。サマンが多角形や正多面体のフラクタル化を行った研究は科学的発見のプロセスに近い。実際、正多面体に関する最初のフラクタル図は1990年に描かれているが、球に描いた線を投影させてドームの建設に応用することをはっきりと考え始めたのはようやく最近になってのことである。一方、構造的に新しいものを取り入れる時の建築家は技術者に似ている。サマンの調和数列の構造の場合がそうである。彼は、調和数列によるラチス・メッシュの梁は時として、規則的なメッシュの梁に比べて軽量になると指摘している。——これは他のすべてにもあてはまる——さらに、一定の場

所とか空間といった立体的なものをつくり出すときの建築家は、芸術家により近い立場になる。その一例としてサマンは建物を日時計に例えている。つまりそれぞれのファサードの向きは、一日のうちのいろいろな活動に対応しているというわけである——東は朝仕事につこうとする顔で、南は公の顔を披露する面、西は社交、そして北はその土地をじっと見つめる姿というふうな。結局、空間をつくり出すということは、形を「発見」し、構造を「考案」し、立体を「創作」するということなのである。建築には操作できない不動の部分と、いろいろに変動する部分とがあって、その両方で成り立っているわけだが、これこそ建築における不動の部分、その本質である。

#### コンテキスト——基本的現実の統合

建築の特性は、感覚に作用する空間をつくり出すところにある。しかしそれは、ある特定の材料によって与えられたコンテキストがあってこそである。そのコンテキストとは規則に沿った社会であり、それぞれの計画や敷地を持ったクライアントである。そして材料は、総体的な概念に具体的な形を与えるものである。建築家が出す答えは、コンテキストを無視することはできない。社会の中での生活は、都市生活における規則によってうまく

いくのである。それに建築は建物だけではなく、もっと広い範囲に関わっているし、クライアントの要求にしても強力でなくても絶対変わらないというわけではない。そこで建築家は、予測しにくいものについても考えなければならぬのである。最終的に建物の形と材料を決定づけるのは敷地であり、それらが建物の性格を形づくっていく。だからこそ建築家は謙虚な姿勢で、敷地のもつ特質や気候とうまく調和しながら仕事を進めなければならないのである。

このようにコンテキストとはいくつかの基本的現実が統合されたものであり、そこから建築家は実体としての空間をつくり出す。もし自然によって特徴づけられたコンテキストが不変だとしたら、建築における変動的な面とは人間そのもの、進化する思考や増大する要求、そしてそれらに対応する技術的技能そのものとなる。テレビやコンピュータ制御の空調などは、建築が統合し適応しなければならない技術的技能のほんの一例である。そういった意味で、建物は人体に例えることができる。人体は、建物のように骨格という構造体で支えられた一定の空間であり、そこに収められた様々な組織を皮膚が覆っていると考えることができる。その第一段階では空間は白黒のホログラムであって、構造とか主題を

Indeed the main elements of the concepts are interactive.

A discovery can eliminate another, an invention can provoke another. In the end science, engineering and art are to paraphrase the classic Greeks, the servants of philosophy. It is none the less the method of enquiry, which is long and cautious, which leads to this trilogy and from which the importance of the attitude which one has given oneself.

Thus the approach of the architect is a little bit like that of the scientist when he works with geometry. The research undertaken by Samyn on the fractalisation of regular polygons and polyhedrals are close to the process of scientific discovery. Indeed his first drawings of fractals, of regular polygons dates from 1990, but it is only now that he begins to envisage an application for them, notably in the construction of domes by projecting these drawings on the sphere.

The architect is a little bit like an engineer when he innovates structurally, as is the case for the structures of harmonic progression and Samyn has noted that the truss beams with meshes in har-

monic progression are in some cases, and all other things being equal, lighter than those with constant meshes.

The architect is closer to the artist when, he creates volumes which generate space visible to the senses. In this regard Samyn underlines that a building is a sundial and that the orientation of each of its facades corresponds to the activities of the day. The East is the morning arrival to work, the South is to the formal welcome, the West is to the party and the North to the contemplation.

In conclusion to create space is to discover geometry, to invent the structure and create space, hence the volume. It is the permanent part of architecture, its essence, because architecture consists of one part which is permanent and another which is ephemeral.

The specificity of architecture lies in the creation of a space which reacts to the senses, but it does so in a given context with specific materials. The context is society with its rules, the client with his programme and the site.

The materials give concrete form to

the overall concept.

The answers which the architect gives cannot ignore the context. Life in society works by rules such as urbanism.

Architecture is not limited to the building but includes also its surrounds. The needs of the client are intense but not unchangeable; the architect therefore has to think of the unforeseen. Finally, it is the site which dictates the form and the material which will characterise it. The architect has to be humble and work in harmony with the climate and the resources of the site. The context is thus the sum of the basic realities from which the architect creates a spatial reality. If the immutable dimension is the context characterised by nature, the material....., the ephemeral side of architecture is the fact of man, of the evolution of his thinking, of his growing needs, and of the technical skills which provide answers to these.

Technical skills, which architecture has to integrate and to which it has to adapt, like television, computers, air-conditioning, are only a few examples. One can establish an analogy between the

欠いた単なる鉛筆のスケッチに過ぎない。主題は、間仕切りや配管やいろいろな処理ユニットといったものが、構造の形になって初めて存在するのである。これは建物における変動的かつ実際の面であるが、これこそ全体を形づくっているものなのである。

このような二分法をさらに発展させると、構造や空間や三次元幾何学に基づいた概念が、建築の不変の部分、本質であるといえる。そして変動的な材料の部分は、社会的規則やクライアントの計画、敷地の物理的性格などで構成されるコンテキストに基づいているといえよう。しかもそういった材料によってこれらのコンテキストは具体的な形を与えられるのである。同様に、感覚による空間の理解にもふたつのレベルがある。ひとつは基本的な要求であり、もうひとつは温度、明るさ、快適さといった快楽あるいは知的快楽に先立つ機能的な要求である。しかし発見・考案・創作という行為が多様性に富んでいるにもかかわらず、我々の感覚を刺激する空間には常に何らかの不変性がある。そこに共通するもの、それが概念である。多様性は、コンテキストや材料から得られているのである。建築家のアプローチはイメージや材料にあるのではなく、基本的な考えに常に「問い」かけること、「なぜ」という疑問を常に提示する姿勢にあ

るのである。

#### 調和——一貫性のある全体の一部

これらのことはすべて、恒久性を考慮した建築についていえることである。人間にとってすべての建物が必ずしも建築家を必要とするわけではない。例えばクリストファー・アレグザンダーの本のように、自分で手作りしようという人のための手引き書もある。住宅は住む人のカリグラフィであり、基本的なものに人それぞれのタッチを加えた写し書きなのである。この「素人」による「手作業の積み重ね」においては保護的な目的が第一であって、発見・考案・創作の入り込む余地はほとんどない。なぜなら人はそこで生き延びることができなければならないし、また自身のルーツを身近に感じていたいからである。したがって、建築家が専門家として必要とされる時の魅惑的な面とは、優先事項がないということ、あるいは「よい」形、「悪い」形、「よい」構造、「悪い」構造などといったものがないということなのである。建築とは、ちょうどよいバランスを得ようとするせめぎ合いの結果であって、そのバランスはその時その時で異なる急務事項に応じて更新されるものなのである。もし「正しい」答えがあるのなら、建築家など必要ないのである。

基本を理解するために絶えず「問い」かける姿勢は、アプローチ以上のものである。それについてサマンは方法論的アプローチによる作品の展覧会開催にあたって次のように書いている。「組立てのプロセスは、長い繰り返しの工程をたどって、不規則な螺旋へと終結する。それは概念と条件とのマトリクスの中で、ランダムに発展していく。そして周囲の現実と、さまざまな基本的原理の統合、分離、調和、矛盾の過程を経て、一貫性のある全体の一部として共存しながら、養われ育っていくのである」

Jean-Luc CAPRON  
建築家

building and the human body. The human body, like the building, is a volume held up by a structure, a skeleton covered by a skin and enclosing the functional organs. At the first stage of conception, the space thus created is a hologram in black and white, it lacks structure and subject matter, it is only a pencil sketch. The subject matter is present in the form of the structures, the partitions, the conduits, the mechanical and electrical unit.

It is the ephemeral and practical side of the building, but it is what makes up the whole.

In developing the dichotomy previously established one can say that the concepts which are based on the trio, geometry, structure and space are the permanent part, the essence of architecture. While the ephemeral materialism is based on the context made up of the rules of society, of the programme of the client and of the physical characteristics of the site as well as by the material through which these contexts are given concrete form.

Similarly the perception of space by the senses has two levels, that of elemen-

tary needs, functional needs prior to pleasure (such as temperature, light, acoustics), and that of intellectual pleasure. None the less despite the diversity of the discovery-invention-creation, there is a constancy in the space which stimulates our senses. The common thread is the concept, variations result from the context and from the material. The approach of the architect is not in images or materials, but in constantly posing the question: "WHY".

All of this is valid for an architecture designed to last, but all buildings for man do not necessarily need an architect. Thus writings such as those of Christopher Alexander are designed to guide the approach of those who practise self building. The domestic architecture is calligraphy, one re-copies the essential things with a personal touch. The protective role of "mans den" leaves little place for discovery, invention or creation. Man has to be able to revive himself there, and to be close to his roots.

Thus the captivating side of the profession of architect is that there is not a

priori, a good or a bad shape, not a good or a bad structure. Architecture is the conclusion of negotiations designed to achieve a balance which is each time renewed between different preoccupations. If there were "right" answers there would be no need for an architect.

The perpetual questioning of things in order to understand the fundamentals is more than an approach, it is a methodology, as Samyn reminds us in writings published by the Institut Supérieur d'Architecture Saint-Luc Brussels on the occasion of an exhibition devoted to his projects: "The process of composition is wrapped up in an irregular spiral in a long iterative process. It develops in a random way in a matrix of concepts and constraints. It is nourished by the realities of the external world and by principles which by virtue, which by coming together and then separating, by harmonising and by becoming contradictory finish by co-existing as part of a coherent whole".